[書評]「G.P.Weisberg、Y.M.L.Weisberg、Japonisme, An Annotated Bibliography」
『ジャポネズリー研究会報』Nr.10ー11 1991年11月1日 pp.30-44.

Gabriel P. Weisberg / Yvonne M. L. Weisberg
Japonisme, An Annotated Bibliography
Garland Publishing Inc. New York & London, 1990
公刊にいたる学会の協力体制のご報告および書評の試み

稲賀繁美

周知のように,1975年クリーブランド美術館で高度に学術的な『ジャポニスム展』が開催されたが，その中心的組織者であったゲイブリエル・P.ワイズバーグ博士は，爾来夫人とともにジャポニスムに関する批判的書誌を準備されてきた。その経過は，既に，1988年末に発行された，『ジャポネズリー研究学会報』7号に，「ジャポニスム研究文献表編纂へのご協力お願い」として，挟み込んだ趣意書でご案内申し上げていたところである。会員の皆様のご支援も得て，今回めでたくその刊行がなり，同書の序には，著者より，ジャポネズリー学会の支援に対する謝意も表明されている。「趣意書」文責者としても，あらためて会員の皆様のご理解とご助力とに深く感謝申し上げるものである。

経過ご報告

さて学会から改めて，同書の書評の要請があって以下の文を草する次第であるが，学会とワイズバーグ博士との間の実務的な連絡役をおおせ付かった者として，立場上いささかの申し開きとお詫びから始めなければならない。事情，お汲み取りいただければ幸である。

まず，学会としての協力体制について，簡単に事実経過を要約しておく。ワ博士からの私信で，書誌編纂のための援助を要請された評者は，ジャポネズリー学会にこの件をお計りしたが，幸い総会のご賛同を得て（88年12月18日）上記の「趣意書」が会報に挟み込まれた(12月25日発行)。この間，ワ博士からも学会あてに公式の援助依頼が届いた。学会では事務局を通じて，いままでの会報にのった研究文献の書誌を欧文訳して，ワ博士あてに発送するとともに，ワ博士より発送されてきた文献カードに可能な限り英文の解題・要約を付し，また著者自身による欧文の要約のある論文はその要約の部分を添付してワ博士に発送した。ただし，ジャポネズリー学会事務局には，該当する論文の抜き刷りがほとんどないため，もとより網羅的な情報をワ博士に提供できる状況ではなかった。そこで，先の「趣意書」によって，会員ひとりひとりの皆様のご協力を仰いだ次第である。

さて，この段階になって，日本語版の『ジャポニスム』展カタログが国立西洋美術館より発行され，日本語での研究に関しては，松本絵里加氏による詳細な文献表が公表されるに至った。ワ博士にはこの事実を連絡し，そのとりあえずの英訳を発送したが，その扱いに関しては，これはあくまで松本氏の著作権に係わる事柄であるの

で，申すまでもなく，学会としては，それ以上立ち入ることは慎しんだ。(p. xxviii参照)。

ざっと以上のような作業過程で，学会として協力したが，論文の最終的な採否選択の判断は，あくまでワ博士夫妻に帰する。公表された結果から推すに，信頼できる欧文のレジュメの入手できなかった論文，ないし日本以外では入手困難な邦語論文は，残念ながら，原則として割愛されたように見受けられる。またこうした作業がもとより遺漏少なしとしないことは著者自身よく自覚されているところであるが，出版社の予算事情もあって，1988年末に情報収集の下限を設定するのが，ぎりぎりのタイム・リミットだったそうで，同年開催されたパリ＝東京での『ジャポニスム』展の展覧会評を網羅する暇はないまま，その後入手できた資料は日本，合衆国その他を問わず，やむなくすべて割愛のうえ，1989年末には最終的な編集作業にも終止符を打たれた由である。以上，学会としての対応にもとより不十分なところはあったものの，残された一ケ月弱の時間と手持ちの不十分な情報の範囲内で，可能な最善を尽くしたことをご報告申し上げ，至らなかった点はくれぐれも会員の皆様のご海容を請う次第である。

*

日本における学術業績集計の難

さてこの批判的書誌に批評を加える段であるが，日本語関係の重大な欠落は，そのほとんどが，協力を依頼されたジャポネズリー研究学会の事務局で迅速に情報を処理できる状況にはなかったことを暴露するに等しく，慙愧に耐えない。しかし，すくなくとも日本語の文献を操作できる研究者には，先述の松本編の文献表で簡単に一応の補いがつくのであってみれば，逆にあらわになるのは，あいもかわらぬ情報の一方的入超現象である。英語をはじめとする外国語に翻訳するに値する文献の存在を，日本の学術研究者以外の層にまで，確実に伝達する情報網の確立に，今後ジャポネズリー学会も，より積極的に取り組まねばならないだろう。とりわけ新聞社，百貨店サイドの主導で重要な展覧会が催されながら，そのカタログや研究論文を組織的に収集するのが，事実上不可能であるという事態は，外国への情報公開における日本の遅滞の典型であって，流通システムの改善を，無理は承知で，あらためて訴えたい。翻って，*Art Index* にしても *Répertoire d'art et d'archéologie* にしても，日本およびジ

ャポニスムの項目を拾えば，海外における研究の完全な情報収集が可能であるという状態にはほど遠い。あらためて学会事務局への内外の情報の集中と，「会報」による会員各位への集計結果の伝達の重要さが確認される所以である。

全体の構成

ジャポニスム研究にかんする文献の解題らしきものは，評者自身すでに『ジャポニスム展』のおりに試みている（『みずゑ』No. 948, 1988秋，120-123頁，但し，英語副題は「Biography」となり笑止，また紙面の都合で一部割愛のほか誤記多し。同じ雑誌には『ジャポニスム』展覧会の拙評も試みたが，いわゆる日本式のエッセーであるので，学術論文とは見なさず，ワ博士の書誌のreviews欄への掲載も謝絶した。もとより手前味噌ながら，専門的な展覧会評発表の場が確保されていないことにも，欧米の基準に照らせば，日本における学術出版の跛行性が現れていると言えるかもしれない)。その場で書いたことと最小限重複せざるを得ないが，一口にジャポニスムといっても，時代，領域に応じて，決して一様の現象ではない。まず，(1)19世紀後半の欧米における日本美術発見とそれへの芸術家たちの反応という，「同世代の批評・証言」と，(3)1970年代以降盛んになった，この文化現象への「学術的研究」とは，そもそも位相を異にしており，同列には論じられない筈である。時間的にも方法論的にもその間にはさまるのが，(2)いわゆる東洋学の一部に位置づけられる「日本学研究としての日本美術研究」であろう。だが，これら三者の関係は，実は互いに反発しつつも持ちつ持たれつであって，いきおいジャポニスム文献書誌の外延と内包とを，否応無くあやふやにする。

まず，(1)「流行としてのジャポニスム」から(2)「専門の日本美術研究」への移行時期であるが，これははなはだ曖昧であって，著者も認める通り，1898-1900年ぐらいに，強引に目安を引くほかあるまい。例えばフェノローサやウィリアム・アンダーヌン，エドモン・ド・ゴンクールの業績（『北斎』1896年），ミシェル・ルヴォンの北斎研究（1896年刊行）が取り上げられていながら，クルトの歌磨研究などをはじめとするゲルマン圏の研究はすでにジャポニスムの範疇外にある，として除外する根拠は必ずしも明白ではないのだが，その一方で，ルイ・オーヴェールの浮世絵研究が見落とされずに済んだのは（登録番号423），浮世絵の印象派への影響を見事に論じた

文章があって，「ジャポニスム研究」の早期の例と見なされたからであろう。またアンリ・フォシオンの北斎研究（初版は1914年）は，故マドレーヌ・ダヴィッド女史の論考（601）のお蔭で，かろうじて言及されているが，このパリ大学美術史講座正教授の来歴は，あらためて，どこまでが「ジャポニスム」流行の産物で，どこからが純然たる学問業績としての「日本美術研究」なのかの確定は不可能である，というジレンマを象徴している（註１）。

ジャポニスムと日本学と

今日のまじめな東洋学者には，ジャポニスムなどというアマチュアの非科学的な興味本位と，自分達の専門的業績とを混同されてはたまらない，という認識を持つ面々も少なくない。自分たちはあくまで東洋を科学的研究の対象とする日本学者であってジャポニスムなどとは関係ない，と嘯くわけだが，これはいささか，自分たちの先祖を強いて抹殺することで，自分たちの学問の純粋性の証しに弁じようとする態度はあるまいか。自分達の研究対象がいかにして学問上の研究対象として認知されるに至ったかについての歴史的経緯を捨象し，対象にそそぐ自らの眼差しを別次元の特権的装置とすることで，自分達の歴史的研究の根拠を超歴史的に正当化する，という矛盾のうえに成立するのが，専門的な歴史家という職業であろう。こうした屈折した潔癖さは，学問の専門化の過程においては，暗黙の必然であるが，とりわけ20世紀前半において，（詩や演劇，さらには映画や建築における，あらたなるジャポニスム進展とは裏腹に）美術における「ジャポニスム」（研究）が雌伏時代を送った一因もここにあるはずである。

20世紀初頭に，美術におけるジャポニスムが日本研究へと変質を遂げた，との認識の存在することは，この「ジャポニスム」書誌において，1900年から1971年の間の出版で収録されたものが，「書籍」については151件中15件，「カタログ」68件中７件，「論文」410件中65件，と不釣り合いに少ないばかりか，書評に至っては57件中ただ１件，「ノート」は該当なし，という不正規分布を呈していることからも明白である。おまけに「カタログ」に関しては，1900年から1959年まで一件も該当物件がなく，60年間の欠落があることになっているが，いったいなぜ20世紀初頭の欧米での日本美術展が，アプリオリに「ジャポニスム」とは無関係と判断されたのか不明である。一例にすぎないが，1910年の日英博覧会出展の日本古美術部門と，1911

年のグラフトン・ギャラリーでの「ポスト・インプレッショニズム」展とを，通りいっぺんとはいえ，対にして論じた，ホルムズのような批評家が忘れられ（註２），1908年の『抽象と感情移入』での美学者ヴォーリンガーや（註３），これは1911年以降になるが「青騎士」における日本美学への言及（628）も，どこにも直接にはコメントされていない(註４)。これは編者の生真面目さが過度の自己規定として働いたものかもしれないが，こういうコメントこそ，最後の「ノート」といういかにも釣り合いに欠けた章に，落ち穂拾いとして集めていただければ，たいへんに重宝だったでもあろう。

20世紀前半の部分におおきな空白が生じた最大の原因は，この時期にゲルマン圏を中心に形成された禅美術観に由来して，戦後の抽象画運動にまで続く系譜が，組織的に排除されたからである。そもそも著者が対象とする「ジャポニスム」とはあくまで「1854-1910」に発生した文化現象であるのだから，これは意図的な脱落であり，別段非難すべき筋合いのものではない。だが，こうした脱落が露呈するのも，ケンプファーから今日までをのっぺらぼうに羅列した編年形式と，著者のたてたジャポニスム定義とのあいだに齟齬があるからにほかならない。このような編年的特異性の存在が確認できるのは，ある意味でこの書誌の利点ではあるが，逆にこのような不連続線が明らかな以上，xxi頁にある「現代ジャポニスム研究1898-1989」という表題が，ある抑圧の産物であることもまた明らかであろう。そこに，実際の歴史的なテクストの生産状況により即したかたちで，あらたなジャポニスムの定義を提唱する可能性も生じてくる。西欧における日本芸術観変遷の観念史という，より広く普遍的な立場から見れば，例えば評者が先に提案したような三分法の時代区分のほうが，より大きな妥当性を持つのではあるまいか。

学問業績としてのジャポニスム研究とその盲点

こんな屁理屈をこねたのも，1972年以来隆盛となった，いわゆる「美術におけるジャポニスム研究」が，東洋学の専門家ではなく，むしろ西洋近代美術史の研究者によって進められた，という屈曲を確認しておきたかったからである。言わば東洋学が忌避して見捨てた尾底骨を，他の分野の専門家が拾いなおして回収するところに「ジャポニスム研究」の発端もあったわけであり，逆にいまさら遺物収集せずとも済む（つまり東洋学内部で常に／既に認知されている）業績は，暗黙のうちに，「ジャポニスム研究」からも除外されたわけ

である。

この第三期の「ジャポニスム研究」の潮流に先鞭を付け，西洋近代美術史研究者の常識の埒外の部分を，探索すべき未開拓領域と見定めた編者は，それだけに，旧来の美術史の枠にとらわれぬ，社会史，社会学的研究の必要を提唱している(pp. xxiii-xxiv)。だが逆にいえば，本書誌がしばしば重大な欠落を呈しているのが，ほかならぬこの領域であるのも事実である。例えば，自らフィリップ・ビュルティー研究に先鞭をつけ，初期のコレクター研究の重要性を指摘しながら(p. xxiii)，当方から資料を発送したものに限っても，天野史郎氏のルイ・ゴンス研究（仏文レジュメ付き）や，近藤映子氏のテオドール・デュレ旧蔵，パリ国立図書館蔵の刷りもの再発見の記事（英文）は脱落しているし，ペトラ・ヒンツ氏による，ドイツ語圏の1900年ごろの日本美術収集についての網羅的な博士論文(『みずゑ』拙稿，27番）も脱落している。また編者は美術商の実態調査の必要を説き，S.ビンク研究でおおきな成果を揚げておきながら，そのライヴァルであった日本人画商について，小説『日の昇るとき』の著者，木々康子氏によってなされた実証的調査報告である，『林忠正とその時代』は，なぜか結局この書誌では，日の目をみなかった。さらに，具体的史料の発掘に尽力されてきた，当学会幹事の瀬木慎一氏，池上忠治氏はじめ，中島徳博，定塚武敏，高橋邦太郎，長谷川栄，横田洋一はじめ，ここで網羅するのは控えさせていただくが，数多くの研究者の業績についても，その具体的な成果の登録は，本書誌でははなはだ不完全な状態にあり，遺憾これに過ぎるはないが，今，多言を慎む。

編者はまた，近接領域の専門家との協働の必要をも説いているが，幕末明治外交史，東西交渉史，近世・近代日本（美術）史，西洋近代美術史の専門にかかわる研究をどこまで含めるか，これまた微妙な選択である。実際，蘭学研究会，明治美術学会，フェノローサ学会，暁斎研究会などで揚げられた，近年の研究成果は，残念ながら，この書誌にはほとんど盛られていない。一例にすぎないが，ジュリア・ミーチ氏の明治浮世絵研究（146）がジャポニスム研究の範疇に入ると考えられるなら，当然，なお多数の明治文化史研究や浮世絵研究の業績も考慮に入れねばならなくなる筈である。例えばエミール・オルリックの名前も，この版画家についての研究にも言及ひとつないのも，その一傍証となろう。また蘭学関係に言及のある論文（457，483，554）には，我々の常識からして，明白な誤謬や欠落が

散見されるが，それらの要約に批判的言辞ないし訂正がないのも，要約の中立性を盾にとった，いささか奇妙な判断停止であって，この客観性の問題には最後に再び言及したい。

索引について

この点に関連して，いささか難点を指摘せざるを得ないのが本書の著者別・主題別索引である。本文を含め，索引の日本人名にしばしば混同および不正確な点のあるのは，適当な校正者が存在しなかった以上しかたなかったとしても，アメリカ合衆国の学術出版としては，本書の主題別索引は決して満足できるほど綿密なものではない。本来，こうした索引からイモヅル式ないしクロス・リフェレンシアルに情報をたどれることこそ，批判的書誌の要件であるのに，そうした連鎖の輪がひろがることも，連想のネットワークにつぎつぎと火が灯ることも，とてもこの書誌からは期待できない。

もとより本書誌が網羅性を意図せず，完璧なることをあらかじめ放棄している以上，意に満たぬところをすべて羅列するのも筋違いであろうから，抜き打ち検査として，わずかな例をあげるにとどめるが，例えば文献623の要約にJules Clartieの名前のないのを訝しがって，著者索引を見ると，もともと（というか，さればこそ，というか）クラルティの1872年の重要なサロン評そのものすら取り上げられていないのが分ってがっかりするし（註５），つづく文献624の「白と黒」国際展覧会が主題索引には拾われていないが，その展覧会カタログも当然のように，「カタログ」の項目には見られず，編者が624情報の裏を取っていないことが露呈してしまっている（註６）。幕末・明治の外交官にして日本学者アーネスト・サトウの名は主題索引にはあるがその著書は無視されているし，ドイツの美術史家エルネスト・グロッセも林忠正との関連で登場こそするが（576），その著書はジャポニスムの範囲外と判断されたのか，取り上げられず，この書誌からだけでは，予備知識のない読者には，これらの固有名詞は何も語りかけて来ない。

検索情報網について

これを要するに，そもそも要約で当然言及されるべき固有名詞が脱落していたり，せっかく要約に取られた固有名詞が索引からは脱落したり，さらには，主題索引には登場する人物の著作が，編年の制限を機械的に遵守したためか，著作としてはリスティングの対象

とならず，したがって著者索引には見いだせない，という調子なのである。おまけにのっぺらぼうの編年的編成ゆえに，登場人物が今日の学者も当時の歴史上人物も区別なくリストに並んだことの必然の結果として，前者はともかくとして後者についてさえ，簡単な略歴，生没年を確認するに足る情報すら，(全体の統一性を考慮してか)例外的にしか盛られていない。これでは，索引に有機的なフィードバックの網の目を構成する磁力など，なくても当然であろう。

だが本来，実証的でパイオニアらしい探索精神に富んだ編者は，手探りで見付け出した資料という，ひとつひとつの点を線に繋いでゆく地道な関連づけの探求作業をこそ金科玉条としてきたはずである。研究の導きであったはずのこうした貴重な探索の手つきが，結果として結実したこの書誌からはきれいさっぱりと払拭され蒸発してしまったわけだが，これはあたかも，完成作品からその製作器具を取り外すつもりで，作品の仕上げの上塗りまでいっしょに剝ぎとってしまったのにも似た，いかにも画龍天睛に欠ける事態かと思われる。

608，627，629，といったあたりには，オフセット・プリンターの暴走に由来する，単純に技術的な脱落が見られるが，これから推測するに，索引の不備と無神経とは，おそらく編集作業の最終工程で，索引の作成をも機械的な自動処理に一任せざるを得ない物理的条件が介入したゆえの事態かとも思われる。だが，とにかくこれだけの史料すべてに目を通した人はおそらく他に何人といないだけに，時間さえあれば最良の索引を手作りで編み上げ得たはずのワイズバーグ夫妻の仕事が，このような不満足な索引で締めくくられたのは，何としても残念なことである。

とまれ，ないない尽くしの連禱は「すっぱいブドウ」の味がするから，このあたりで止めにして，以下，445頁729件にのぼる書誌の内容の検討に移りたい。

*

ワイズバーグ博士には，既に*The Realist Debate, A Bibliography of French Realist Painting, 1830-1885,* 1984という批判的書誌編纂の仕事がある。いま手元にないため，確認できないが，今回のジャポニスム書誌も，形式として，この前著を踏襲したものと思しい。評者もこの写実主義書誌にはずいぶんとお世話になり，パリ国立図書館の参考室で偶然見付けて，時を忘れて読み耽ったのも，いまでは懐かしい思い出だが，ここには，自然主義関係の一部の文献のみ

ならず，時として美術の世界とは無関係にみえる哲学上の実在論に関する，エティエンヌ・ジルソンだかの論考もたち混っていて，これには，いささか苦笑を禁じ得なかった。これまたうろ覚えで申し訳ないが，同書の書評にも，レアリスムの概念規定が曖昧なため，ちぐはぐなものがひとしなみに寄せ集められ，強引に編者のブルドーザー式整地法で，見たところ均一な表情を作って鎮座ましましている，といった皮肉な言葉があったように記憶している。今回のジャポニスム書誌では，前回ほど明白な定義上の混乱はなく，派手な論争も今のところ合衆国の美術史界では発生していないようであるが，結果として前著をしのぐ大冊となったのをみれば，対象の豊かさ，複雑さも，たやすく想像できようというものである。

書目の選択

はたして，読みやすいが，日本人の感覚（？）からすると，いかにも大味で，多少上っ面をなでたような要約の均質性－これは合衆国の学問風土であって，むげに批判すべき筋合いのものではないが－から想像されるのとは違って，取り上げられた著作・論文は，その性質においてもその選択基準においても，首尾一貫からはほど遠い。編者も示唆するように，ヴェンクシュテルンの書誌（117）を導きとしたらしい，1900年以前の「書籍」の項目には，「美術におけるジャポニスム」の書誌としては，どう見ても不必要なものまで含めた数多くの，日本に関する旅行記，案内記の類いが，美術への言及の有無を必ずしも考慮せぬまま，収録されている。ところがその一方で，これらの著作に関する最近の研究である，例えばジェラール・シアリの博士論文（“De l'utopie à l'apolie : représentation du Japon d'après les relations de voyageurs anglais et français de 1853 à 1912”, *Corps écrits,* n° 17, pp. 41-48参照）は脱落しているし，またラフカディオ・ハーンの著作を考慮にいれながら，それについての研究書として，ローゼンストーンの研究に言及しつつ（151），その一方で，例えば問題の多い博士論文ではあるが，Bernadette Lemoine, *Exotisme spirituel et esthétique dans la vie et l'œuvre de Lafcadio Hearn,* Paris, Didier érudition, 1988）をはじめとする数多くの業績は見落とされている。

これらは，対象を「美術におけるジャポニスム」に限定すると宣言しながら，日本に関する初期の情報は出来る限り網羅的に取り込もうと欲張り，また精神史としてのジャポニスムにも，いささか無

理に手を延ばしたが為に発生した脱落であり，不均衡であるが，こうした混乱も，編者が美術史の専門家であればこその事態であろう。アメリカ合衆国の学会公認出版物に限っても，日本に関する文学の研究者や日本学者からみれば，天心の『茶の本』はじめ，まだかなりの脱漏が指摘されることとなるだろう。だが，文学における日本像の系譜を辿るのは，本書の主題を大きく逸脱するから，他の専門領域での常識に属する書目の脱落にはひとまず目を瞑り，この点には深入りせぬこととする。

歴史史料におけるキーワードの処理

むしろ，本書の眼目は，「ジャポニスム研究」なくしては埋もれたままであった書籍・論文の発掘と整理にある。とにかくこれだけ膨大な史料のコーパスを読み込んで，そのほとんどすべてに要約と解題をつけたその努力には圧倒されるが，その量に感嘆するだけにかえって質の面で期待倒れな場合の少なくないことも，もとより望蜀とは知りつつ，敢えて指摘したい。例えば，要約を読むと，浮世絵よりも室町水墨画をはるかに上位に置いて，フランスの浮世絵気違いたちをあざ笑ったスコットランド人医師ウィリアム・アンダースンが，典型的な日本芸術家を「能筆家および印象家」(76) と規定していたことが記述してある（この文章は編者によって引用されているが，これらの出典の頁数が一度として記入されていない）(註7)。

この指摘が興味深いのも，このあたりの文献を少し読み込んだ人間なら，いろいろと連想を逞しくすることができるからで，例えばアンダースンから『北斎』関係の資料教示に関して慇懃無礼にあしらわれたエドモン・ド・ゴンクールその人が，浮世絵のことを「印象」と呼んでいるし，その友人の美術批評家テオドール・デュレが，浮世絵こそフランス印象派の起源であると唱えたのに対し，74年のいわゆる第一回印象派展となる展覧会を評して，同郷の先輩批評家ジュール・カスタニャリーが，かれらを日本人と形容するのは無意味であって，むしろ「印象派」という新語を当てるべきだと宣言したとか（これらの文は採録されていない），ル・ブラン・ド・ヴェルネー (54, 328) が日本美術こそ真の印象派であって，フランスのそれは下手な亜流にすぎぬと反論したり，世紀末のヴァグネリアン，テオドール・ド・ヴィツワ (371) が，われらの印象派が日本の真似をしてもはじまらぬ，と悪態をついたことなど，次々に思いだされ

る。

ところが編者の要約を読んでみると，この「印象」という重要なキータームは，以上の文献いずれからもきれいに捨象されてしまっている。もう一度原文に遡って捜し直さないかぎり，「印象派と日本」という主題にまつわる観念史的連環を編年的に復元することは，もはや不可能なのである。そればかりか，例えば，リヒャルト・ムーターが大著『19世紀絵画史』(1893-94年）において，写実派と印象派とのあいだの飛躍に橋渡しをする必要に迫られ，あきらかにエルネスト・シェノーなどフランスの美術批評家たちを孫びきしながら，当時知られた限りでの「日本美術史」一章を執筆し，それを西欧の「写実派」と「印象派」とを論じた章の間に挿入せざるを得なかったこととか，さらには，ヴァイズバッハが同じく奇怪なる大著『印象主義，古代と近代における絵画の一問題』(1910-11年）（註８）において，日本をはじめとして，世界中のあらゆる美術のなかの主要な一傾向として「印象主義」を摘出し，この言葉に，のちにひとが「バロック」や「マニエリスム」に託すのと同様の夢を込めたことなど，ジャポニスムが発揮した思わぬ文化史的影響のこともすぐに思い浮かぶところであるのに，これらの著作は，この書誌では，一度として正面から取りあげられてはいない（ムーターの著作は，索引にはミューターと誤記して，430 に孫びきしてあるが，それだけに原著や，この批評家の1900年のヴィーン・ゼツェッシオーンにおける日本の影響に関する貴重な評論－クラウス・ベルガー氏の『ヤポニスムス』巻末に復刻され，また吉田秀和氏が利用されている－が何故無視されたのか，理解に苦しむところである)。

書誌とアンソロジーと

以上は「印象派」という言葉に限って，評者の歯痒さのほんの一例を示したにすぎない。これらの評言が，もとより無い物ねだりにすぎないことも承知のうえであるが，ただ，一次的な原史料を要約するという努力の，愚かさとまではいわぬにせよ，むくわれぬ面を指摘しておきたいのである。この点パリ＝東京の『ジャポニスム』展にラカンブル＝エスマン編で掲載された，当時の証言のアンソロジーの重要性があらためて確認されるわけだが，生憎こちらの方には，解題と註とがまったく欠けている。といって，自分で申し上げるのもおこがましいが，評者は自分の博士論文 (656) の補遺に，批判的な道具立てを加味したジャポニスム主要文献アンソロジーを編

んでみたものだが，註のなかで著者の略歴や，問題となっている主要な観念—「記憶」，「装飾性」，「大芸術と小芸術」，「原色」，「光と陰影」，「写実性」，「不規則性」などなど—，の歴史的脈絡を復元しようとした結果，これがあまりに膨大かつ錯綜したものとなって，到底通読不可能な代物となってしまったことも白状しておくべきだろう。評者は未見であるが，デイヴィッド・ブロムフィールドの博士論文（645）も，この点に完璧を期するあまり，かえって整理不能に陥っているそうであるから，結局，この種の一次史料の操作でもっとも成功した例は，評者の知る限り，フィリス=アン・フロイドの博士論文（651）の第二部，ということになる。

いまひとつ不満なのは，扱われた史料の「標高」が不明で，通読しても，必ずしも「地図」の等高線が明瞭になってこないことである。1900年以前の「同時代史料」，とりわけ「論文」の要約は，新聞・雑誌などに分載された場合など，その一回一回を個別に扱って，いささか不釣り合いに細部の要約に拘泥する—それもその論文独自の部分ばかりではなく，同時代のほかの論文と同工異曲の最大公約数的な部分をも，飽きずに省略せず繰り返し一本調子に書きつらねている—が，そのわりには，先にも述べたように，その論文に固有の特異性や肝心なキー・タームが脱落する。たしかに評者の目から見ても重要と感じられる論考には，とにかく多くの紙面を割く傾向のみられるのは事実であるが，これまた合衆国アカデミズムの通弊であろうか，かえって原文の迫力が水で薄められ，間延びした印象を抱かされる場合も多く，わざわざ引用された箇所もかならずしも最良のパッセージとは限らない。（これも一例に過ぎないが，ラ・ファージの1870年の「日本美術についてのエッセイ」が脱落しているが，これは評者のみるところ，シェノーの67年の論考（256-58）に多くを負ったものではあるが，ジェイムズ・ジャーベスの論文（45，271-275；現在タトルより復刊されている）とともに，合衆国における初期の重要かつ最良の文献のひとつであるので，こればかりは言及してほしかった）（註9）。

要約における焦点距離

他方，1900年から1972年に至る，忘れられた先駆的研究業績への評価も，料理の仕方はいかにもアメリカ流の無味乾燥で評者の口にはあわないが（when, why, how, whatなどという言葉は要約からは極力排除して，むしろその具体的内容を記述すべきではあるまい

か)，それでも先見性のある独創的な論文に対する編者の敬意は，まごうかたなく現れていて，はなはだ主情的な感想でしかないが，上滑りに通読しても，それなりの緊張と快感がある。

さて，扱う著作，論考が「ジャポニスムの時代」ではなく，「ジャポニスム研究」の範囲内にはいる時期以降，以上にのべたような，一次資料が不用意に骨抜きにされて地ならしされる，という不都合はもはや原理的には存在しないはずである。だがここで別の不満が出る。

これ以降，「ジャポニスム研究」は，トマス・クーンいうところの通常科学として機能しはじめるわけだが，その際の研究業績に対する焦点距離の取り方が，評者には必ずしも納得できないのである。一方で，個々の研究によってあきらかにされた細部の実証的情報は不十分にしか伝達されず，あらためて元の論文を読み直さねば必要なデータが得られないから，この書誌の記載でもってノートの代用にすることはできない。他方，論文の著者の解釈にまつわる（と編者が判断する）部分には，「著者曰く」式の挿入句があって，一応編者がその意見に同意することを保留する，ないしその意見を著者の独創として距離を取る姿勢は見せている。だが，こうした挿入句が要約の中性化を促進するためであろうか，それ以上に踏み込んだ編者としての先行業績批判は，(ときたまコメントが皮肉っぽく読める場合を除けば）極めて注意ぶかく忌避されている。

たしかに，批判がましい言辞を組織的に回避した態度は，編者自身の論文も多く収録されているだけに，それなりに必要とされる中立性であったろうし，また尊重されるべき良心的態度でもあろう。だがこれは，歴史史料の要約と先行研究業績の紹介とを区別せずに同一の形式で処理するという選択をくだしたために，編者が知らず知らずはまりこんだジレンマではなかったか。斯界の第一人者のひとりたることを，自他ともにゆるす編者であれば，先行する研究が，その後どのような実証的データにより反証され，誰の手で，その仮説が反論を被ったかよくご承知のはずである。そうした学問史的な流れを再構成し，論文相互の関連を明記して，該当する論文の歴史的位置付けを，いまひとつ積極的に打ち出すのは容易だったはずであり，またそれが学者として当然の責務ではなかったか。たしかにときたま先行業績との関連が示唆される場合もあるが，それが該当の論文の褒め言葉としてのみ登場するのに，かえって奇異の念を抱くのは評者のひねくれであろうか。

中立性の陥穽

だが，それ以上にこの「中立性」が問題を孕むのは，むしろ当たらず触らずの遠慮がいささか過ぎたことの代償として，どこか，要約方法の客観性と，要約した内容の客観性とが混同された気配があるからである。記述の客観性と判断保留とのすり替えが，要約における内在的批判を回避させ，その結果，論文著者の言い分をいささか安易にまかり通らせる方便と化している場合すら見られる。論文の著者自身が実証性の限界に意識的である場合（597など）は良いとしても，時として，著者自身による論文のサマリーを鵜呑みにした，単なる言い直しに終わっている要約も散見される。とるに足らぬ（と評者は主観的に判断している）小論文や評論文に不必要なまでの紙面を割く一方で，膨大な博士論文には，隔靴掻痒ないし上っ面を撫でただけの，一知半解の要約が付されたにすぎない場合もある。無論，所詮公共機関での制限された閲覧条件では通読不可能な博士論文のこととて，要約に出来不出来の振幅が大きいのは，いたしかたないことでもあり，むしろ編者の誠実さの証しであるのかもしれないけれど。

評者自身多くの学恩を蒙っている編者であればこそ，最後にあえて意地悪な評言を許していただきたい。15年間にわたって，おそらく筆舌に尽くしがたい物理的・精神的制約を乗り越えた末に果たされた偉業ではあるけれど，この書誌は，形式の一貫性を優先し，そのために，批判もせず，批判もされぬ焦点距離を選んで，無私で公正な要約を目指した代価として，必然的に，論ずべき対象よりも理（きめ）の細かな文章が生産できなくなる，というジレンマをしょい込んだように思われる。だが，その限りにおいてこれは，一見そつのない外見の下に，学問の限界を如実に感じさせるだけの鬼気を宿した業績であるといえるだろう。

*

以上，いささか無理無体な注文にばかり終始した感もあるが，とまれこれだけ量の，それも図書館の保存状態からいって，コピーの収集だけでも困難な資料の山を，まがりなりにも押さえ込んだ力量は，編者以外にはちょっと期待できない。ましてや，日本で匹敵するだけの体系的な集成作業を本来達成すべき立場にある学会の会員が，先を越された悔しさに，屁理屈をこねるのは，それこそゴマメの歯軋りの類いにほかならない。ビブリオグラフィーというものが

示す宇宙の完結性は，もとよりまやかしの擬制，とりあえずの妥協の産物にすぎない。言うも陳腐な事だが，ここにまとめられた史料はなお数倍するであろう暗黙の史料群を引きずっており，それらとの関連のなかに，さらなる研究の可能性は常に開かれているのだから，われわれは終わりなき航海への，一見明快だがその実無数の謎を隠し込んだ，この今後代替不可能な必携の道しるべをまとめられた編者のご努力と，(評者の謝辞に応えた編者自身の私信にある文句を拝借させていただけば)「刻苦奮闘の責任感」とに，あらためて深い感謝と敬意とを表明しようと思う。

1990年9月5日

追記（1991年10月5日）

本文で言及しながら、その書誌を掲げなかった論文で、ワイズバーグ氏の本に記事のないものに限り、言及の順に以下若干列挙する。

（1）Henri Focillon, *Essai sur le génie japonais,* Lyon, Publication du comité franco-japonais, 1918.

（2）C.-L. Holms, "The Use of Japanese Art to Europe", *Burlington Magazine,*Nr. 13, 1905, pp. 5 - 8 .

（3）Wilhelm Worringer, *Abstraktion und Einfühlung,* München, 1908, S. 71.

（4）Kandinskyと日本との実証的な関係についてはErdmute White夫人が，フーゴー・バルの未公刊史料を援用した研究を国際比較文学会（東京，1991年8月）で発表した。

（5）Jules Clartie, *Peintures et sculptures contemporaines,* Paris, 1873.（三浦篤氏のご教示による）。

（6）*Catalogue illustrê de l'Exposition internationale de Blanc et Noir,* (Troisième année) , Paris, 1888 (丹尾安典氏のご教示による。なお『ジャポニスム展』カタログ日本語版69ページ参照)。

（7）アンダースンとゴンクールとの諍いについては、拙博士論文（文献番号656)、598ページ参照。

（8）W. Weisbach, *Impressionismus, Ein Problem der Malerei in der Antike und Neuzeit,* Berlin, 1910-11.

（9）なおTitsinghの書簡、旅行記などの刊行計画をライデンのFrank Lequin博士から数年前に伺ったが、その後の動向をご存じの方があれば、お教えいただければ幸である。

編集後記

本号も合併号となってしまったが、漸く暦年に発行年度が追いついた。この編集には、本年1月の第11回総会において任命された学会実行委員5名（別項名簿参照）があたった。度々の会合の結果が、この第10-11号である。特にブリヂストン美術館学芸課長の宮崎克己氏にはお世話になった。また、事務局員に着任された中村晴美さんのお蔭で、会務がスムーズに進行している。特に会費の集まり具合は心配らしいが、会員各位も中村さんを悲しませないよう、よろしく会費の納入に御協力を頂きたい。

最後になったが、この学会報を発行する資金を提供して下さった石橋財団に心から感謝申し上げたい。財団の援助がなかったら、この学会報は発行の見込みさえ立たなかったに違いないからである。

（小林利延）

ジャポネズリー研究学会会報　10、11
編集　池上忠治・小林利延・宮崎克己
発行　ジャポネズリー研究学会
東京都中央区京橋1-10-1　ブリヂストン美術館内（〒104）
Society for the Study of Japonisme
c/o Bridgestone Museum of Art, 1-10-1 Kyobashi, Chuo-ku,Tokyo 104
☎（03）3563-0241
1991年11月1日
製作　㈱ケー・アンド・エス
Printed in Japan,©1991

郵便振替　振込先　口座番号　東京0-558061
ジャポネズリー研究学会
銀行振替　振込先　住友銀行八重洲通支店　普通預金口座　779924
ジャポネズリー研究学会　阿部信雄